

平成 31 年 3 月 28 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880076

氏名

山崎 世理愛

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ルーヴァン (国名 ベルギー)
2. 研究課題名 (和文) : エジプト中王国時代の埋葬研究：死者の装いから葬送儀礼を読み解く
3. 派遣期間：平成 30 年 9 月 12 日 ~ 平成 31 年 3 月 5 日 (175 日間)
4. 受入機関名・部局名：ルーヴァン・カトリック大学 (KU Leuven) ・ Faculty of Arts
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

受入研究者による個人指導：

自身の研究分野に近い教授から定期的に個人指導を受けた。具体的には、まず指導前にエジプト中王国時代に副葬品として利用された装身具を対象に、組成および副葬位置の分析をおこなった。そして、個人指導ではエミクな視点から装身具カテゴリの復元を試み、葬送儀礼において各カテゴリの装身具が担った役割について考察した。さらに、オブジェクト・フリーズと呼ばれる木棺に描かれた装飾帯、コフィンテキストやピラミッドテキストといった文字資料をもとに、それらに示された葬送儀礼と実際の装身具の副葬行為はどのように関連していたのかを議論した。

講義およびゼミへの参加：

派遣先大学の講義に参加し、古代エジプトの社会階層による埋葬習慣の違いについて知識を深めた。さらにエジプト語のゼミにも出席し、「ハルクフの自叙伝」をはじめ、古エジプト語と中期エジプト語で書かれた複数のテキストを読解した。当該ゼミでは、学生にテキストの訳や文法の説明をさせるだけでなく、テキストの内容に関する議論も活発におこなわれた。また、実習形式のゼミにも参加し、毎週ブリュッセルのサンカントネール博物館に赴き、所蔵資料の実測・写真撮影・3D スキャン・ドキュメンテーションの作業をおこなった。

資料調査：

受入研究者の先生の紹介で、ライデン大学にあるオランダ近東研究所 (NINO) を訪問し、オブジェクト・フリーズが描かれた木棺アーカイブの資料調査を二度にわたっておこなった。その結果、博士論文を執筆する上で核となる多数の資料を入手することができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究成果発表等の見通し :

派遣先大学での研究成果の一部は、既に和文で学術雑誌に投稿済みである。査読も通過しており、3月に刊行される予定である。また、派遣先大学でエジプト学を専門とする教授やその他先生、大学院生、学部生を対象にした研究発表会においても口頭発表をおこなった。さらに、滞在中の研究成果の全ては英文でまとめており、論文として出版するための指導も受けた。2019年度に海外の学術雑誌 *Studien zur Altägyptischen Kultur* に投稿する予定である。

そして、今回の研究成果を踏まえ、博士論文執筆に向けてさらに発展させた分析・考察結果を国内外の学会で口頭発表する予定である。直近では、4月13日におこなわれる早稲田大学考古学会 2019年度研究発表会において、今回の研究成果を基盤とした発表をする。

今後の研究計画の方向性 :

今回の滞在中では、自身でおこなった分析によって導き出された結果について、教授との議論をもとにその背景を考察することが中心となった。今後は、資料調査によって得られたオブジェクト・フリーズ付き木棺アーカイブ資料を整理・分析し、各装身具に対する当時の認識をより具体的に明らかにしていく。また、対象資料の範囲を拡大し、オブジェクト・フリーズやその他テキストに示されなかったドメスティックな性質をもつ装身具・護符が実際にはどのような意図のもと利用されたのかについても分析をおこなう予定である。さらに、教授と議論をする中で、食糧以外の供物儀礼行為を明らかにするには考古学的な分析や考察が必須であることが再確認された。装身具だけでなく、最終的にはその他副葬品にも目を向けて葬送儀礼行為全体を復元していきたい。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

- i. エジプト学の中心地は欧米であり、中でもエジプト中王国時代に関する研究が精力的におこなわれているのがベルギーのルーヴァン・カトリック大学である。受入研究者のハルコ・ウィレムズ (Harco Willems) 教授は、中王国時代の葬送に関する研究を長年に渡っておこなっており、当該時代研究を牽引してきた中心的研究者の1人なのである。自身の研究にとって非常に重要なオブジェクト・フリーズに関する主要な先行研究も彼によるものである。そのような研究者から直接研究指導を受けることで、自身の現在の研究に対する具体的な助言をもらえただけでなく、今後の研究の方向性についても改めて考えることができた。
- ii. 受入研究者の紹介によって、ライデン大学オランダ近東研究所 (NINO) 所蔵の木棺アーカイブの資料調査をおこなうことができた。木棺の資料を収集することは非常に困難であると言われており、実際に私も数年間かけて集積できたオブジェクト・フリーズの資料数は20点ほどであった。それが今回の二度にわたる資料調査により、一気に100点近くの資料を入手することができた。また、ルーヴァン・カトリック大学およびサンカントネール博物館の図書室を利用する許可も得られ、これらを利用することで自身の研究に重要な資料を迅速かつ網羅的に収集することができた。特にルーヴァン・カトリック大学では、オンラインで多数の学術雑誌を無料ダウンロードすることができ、非常に有益であった。
- iii. ルーヴァン・カトリック大学に在籍するエジプト学を専門とする博士課程の学生は、そのほとんどが中王国時代を対象に研究をおこなっている。日本では中王国時代を対象とする研究者は非常に少なく、当該時代の研究に関して日常的に議論をすることは難しい。そのため、今回の派遣では学生との交流が非常に有益であった。互いに情報交換をしたり、研究について議論することで、様々な視点からのアドバイスをもらうことができた。